令和2年１月10日
第4号
こども青少年局　保育･教育人材課　幼保小連携担当

「幼保小連携だより」

育ちと学びをつなぐ

2020年を迎えました。幼保小連携・接続の重要性が明確に位置付けられた幼児教育にかかわる指針や要領の実施に続き、小学校でも新学習指導要領が全面実施となり、いよいよ新しい時代の教育が始まります。各校・園におかれましては、幼保小連携事業への御理解と御協力をお願いいたします。

「幼保小連携フォーラム」

「一人ひとりが、その子らしく輝く横浜の保育・教育」

令和元年12月14日(土)南公会堂にて、「幼保小連携フォーラム」を開催しました。当日は、幼保小の保育・教育関係者、保護者・地域の皆様が市内県外からも多くの参加をいただき、育ちと学びをつなぐ意義について改めて学ぶことができました。ありがとうございました。

第１部　連携推進地区（2年目・3年目）と参加者によるポスターセッション
第２部　ポスターセッション講評
　　梅林地区　　横浜市立梅林小学校
　　にじいろ保育園新杉田
　　講　　師　　渋谷　一典　氏、河合　優子　氏による講評
第３部　実践提案&パネルディスカッション
　　ベネッセ日吉保育園
　　認定こども園峯岡幼稚園
　　横浜市立すみれが丘小学校
　　横浜市立桂小学校
第４部　全体講評&講演　『幼保小連携・接続のこれから』
　　渋谷　一典　氏　　河合　優子　氏

参会者の声

・ポスターセッションは、現場の熱い生の声を聴くことができ、とても良かったです。子どもの願いや思いを叶えるために大人が繋がり合って育ちと学びをつなぐ軸を見つけていくことが大切だと思いました。

ポスターセッション

幼保小連携のモデル地区である24の推進地区と参加者によるポスターセッションを通して、それぞれの立場で保育や教育の質向上につながるヒントとなりました。

参会者の声

・様々な地区の幼保小連携のポスターセッション、発表を聞いてとても刺激になりました。自分の園ならどんなことができるか、子どもの主体性を大切にこれからの保育をさらに深めていきたいと思いました。
・いろいろな取組を見られたこと、疑問に思ったことを直接話すことができ有意義でした。自分自身の保育の振り返りにもなりました。

ポスターセッション講評

梅林地区のポスターセッションの内容

梅林地区は、連携・交流する３つの園が梅林小の梅と出合い、興味・関心を広げ梅の実を使ったジャムづくりや梅研究ごっこ、梅の枝染め活動を展開していきました。遊びを通して豊かな体験を重ねることで、自ら考え、解決し、自己肯定感を味わったり、友達とともに力を合わせることの楽しさを味わったりしていきました。小学校ではそうした園での学びの芽を大切に引き継ぎ、10 の姿を踏まえた生活科を実施し学びに向かう力をさらに育んでいきました。講師の渋谷先生から、連携・交流にその地区ならではの「軸」を創ることは大切であるとの御助言をいただきました。

実践報告・パネルディスカッション

講演

実践提案・講演内容

・ベネッセ日吉保育園：一人の児童の興味から、すもうをとる活動だけでなく、まわしを染める活動にも発展しました。
・峯岡幼稚園：預かり保育の時間で、キャンプごっこから始まり、本物のピザ作りや火おこしにも挑戦しています。
・すみれが丘小学校：カラーコップやカラー割りばしを使い、園児にも小学生にも学びがある交流を実施しました。
〇お二人の調査官からは、幼児教育と小学校教育の何を「接続」するのか、また、両者をつなぐことの意味や価値をお聞きしました。

参会者の声

・保育園、幼稚園、こども園、小学校、それぞれの歴史、成り立ち、役割があり、相手の立場をまずは理解することが大切な一歩だと感じました。その上で子どもたちを真ん中に主体性を育む保育・教育をどう実現していくのかを考えていくことが重要だと思いました。
・それぞれの園や学校の実践を聞き、取り入れてみたいと思いました。子どもたちの「やりたい」が大切にされる、保育内容を考えていきたいと思いました。
・大人が示すことを子どもがやるのではなく、子どもがやりたいことを主体的にできる環境づくりや一緒に考えていくことの大切さを感じました。
・幼保小のつながり、一体化を感じる活動が行われていることを知りました。自園でも小学校との交流はあるものの単発で終わってしまう印象があり、交流はこういうものと認識していたが、今日の学びから、つながり継続されていく活動へ変化していくような取組を考えていきたい。
・柱になるもの、軸のある連携・交流活動がこれからの連携推進活動の一つの考え方になっていると思いました。子どもの「やりたい」を原動力に「交流の軸」をもってという言葉が印象的でした。
・幼保小連携を踏まえたカリキュラムの充実を目指すことが授業改善、学校運営、新学習指導要領に則った教育の充実につながると確信できました。「目的を共有する軸を創る」ことの大切さを再確認しました。